

昭和49年10月15日 初刷

平成7年3月31日 2刷(500)

編集・発行

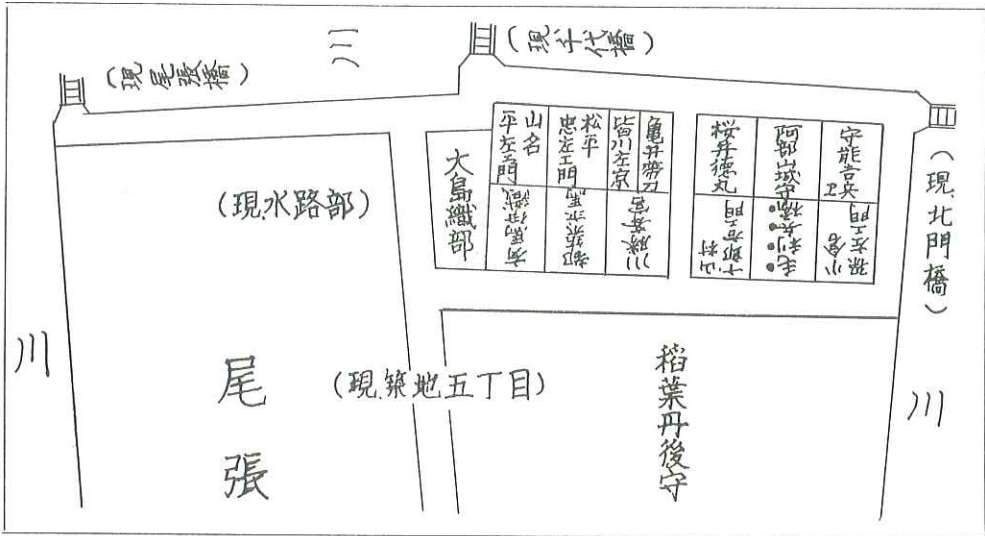
東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 3543-9025

郷土室だより

明和のころの築地五丁目西部―御府内沿革図書による



仙台藩医

工藤周庵の生活

江戸図を覗れば一目瞭然たる如く江戸時代の中央区は、過半は武家地で占められていた。それにもかかわらず、武家屋敷のことはいつこう明らかにされていない。

大江戸百万の人口を支えていた商人の活動を記述するのに追われて、武家屋敷のことには筆がおよばなかったのかも知れない。

幕末維新の大変革に際し、江戸を退転する諸藩邸では、必要最少限度の記録を残して、他はことごとく火中に投じたであろうから、さらでだに乏しい江戸の武家屋敷の資料は、ほとんど残っておらず、そこでどのような生活が営まれていたかということとは漠として知るを得ぬ。

それゆえ、明和・安永の頃、築地に任んでいた仙台藩医工藤周庵の生活がその娘の綾子(筆名真葛)によって、詳細に書き残されていたということは珍らしい例で、我々としても教えられるところが頗る多い。

周庵は、仙台藩の江戸詰医師で、通称は平助、名は球郷、字は元琳、号を万光といった。若くして長崎に

赴いて医学を収め、三十代にはその名を四方に知られるにいたった。

長崎の通辞吉雄幸作などは周庵に心酔し、医学修業の書生を三人まで周庵の許に送っており、有名な動物画譜ドドネウスの写本を、書生に託して贈ってきたことがあるくらいであった。周庵は変わった人で、訴訟の弁護をすることが好きで、弁護に立てばかならず勝訴に持ちこむことができたので、その謝礼を受けることが多く、或時のごときは、一挙に千金の謝礼を得ること二度におよび、聞く人々を驚倒せしめたという。

その家には絶えず食客がごろごろしていた。林子平などもその一人である。かの有名な『海国兵談』は、周庵の言説による所が多いといわれる。

周庵には『赤蝦夷風俗考』のほか若干の著作があったが、幕府の忌諱に触れることを恐れて、家人も人に示さず、林子平ほどに人に知られずに終わったのは惜むべきである。その没したのは寛政十二年十二月十日、享年六十二才であった。

周庵の長女綾子は、父に似て頭脳明晰、文章を能くし、郷里の妹のために『昔語り』五巻を著わした。

原文の趣きを損われぬ程度に、現代文に書き改めてこれを紹介しよう。

昔 語 り 工 藤 真 葛

1 築 地 の 家

父の任んでいた江戸築地の家は毛利兵橋という三百石取りの旗本衆の家でした。向う側は稲葉様のお邸、地主は左隣。右隣はほかの人の地所でした。

この右隣は角屋敷で、南受けのしく好い所ですけれども、鬼門だといって明地になっていました。

父様は、百坪の地所いっぱい御普請をしたものですから、庭はありませんでしたけれども、南の方は大明地があることとて、広々としてよろしゅうございました。

ところが、この空地を内田玄松様という幅利きの奥医が、五百坪の内二百坪ばかり借うけて、普請して住むことになりました。その折、それではあまりこちらが台無しになってしまいますので、隣りの地所を三尺通り借入れなされたといひます。

肝腎の見晴しの好い奥の垣際へ、二階造りの蔵を立てられたものですから富士の代りに白壁を見るようなことになりました。……もつともこれは、私などまだ生れぬ先のことです。

奥の庭は、向うへ三間ばかりの広さ

で、横四間ばかり有った所へ、八重の紅梅が一本―これはしごくみごとな梅で、花は多く咲きましたが、実は一つも成りません。そのほかには、すばい

桃と、梨が一本ありました。この三本の木はいずれも勝れたものでした。

中でも梅は、ほかに比べるものもないくらいで、春海（村田氏）が、

春雨にひもとく梅のくれないは

ふりすてゝこそ色まさりけり

と読んだのを見ても、この紅梅が思いだされるようでした。

桃は味が勝れてよく、夏桃で、世間に珍らしい時に熟すので、賞翫されました。梨は勝れた水梨で、ことのほか甘うございました。少しも口中にかすの残るものがなく、雪を食べるように柔かいたのでした。この家を去って後、私はついぞこのような梨を食べたことがありません。

その三本の木と、こちら側の日さし戸に、物干竿をかけたのを思ってくださいれば、庭の間数も知れましよう。

地界の垣根は割竹で、それにつけて一重の山吹が隙間もなく植えてありました。中央は花壇で、草花があれこれ植えてあります。それに：隣の空地を

少しばかりお借になって菜園としてありました。後にその家へ行って見ましたら、庭に大きなえんじゅの木がありました。その菜園にあったのがそのまま成長したのでした。

2 お父様の頓智

地主の兵橋様は、しごくの固ぶつでお子さんも多くお持ちでしたが、だんだんに欠けて、私が覚えてからは、四人のお子がおありでした。

北の方角に明地があつたのを、「公儀御らんぶ」（御能狂言）の触頭松井喜左衛門という人に百坪貸された時、

その角に不浄門のあつたのをつぶして父様に申入られるには「この不浄門の所が貸地と成りましたので、今後葬礼を出します時は、その方角の門から出すこととしたいのですが、この儀悪しからず」と言われました。お父様は

これをお聞きになって、「面白からず思われたのでしよう。ずいぶん承知仕りました。殿様・奥様・若殿様、御勝手次第、明日からでもご随意にお通りになってください。」

とお答えになりましたから、相手は返事にこまって「そういうことならば、その方角からは通しますまい。」と言われて、このことはさたやみになった

そうです。頭からいきなり、それはお断りするというよりは、もつともな筋合で、相手をへこまされた、うまい返事をなさるものだと思つたことです。お父様は、かようなおもしろいご挨拶などは、いくらでも湧いて出るお方でした。

3 鬼 門 の 家

地主の毛利様と裏合せに、亀井様といつて、三万石の小大名の家がありました。その家老の島田伝八といつた人は父様と同年でことのほかの好々爺、父とは大懇意でした。

島田さんの隠居夫婦が、先にいった鬼門屋敷の角地を借て、私達は隠居の身ですから長命の望みはありません、といつて、普請して引越されました。手狭で勝手よく、奇麗な家でした。

小身の大名の家老は練合いの好いもので、芸者・役人・角力取などが、日ごとのように出入して、それはそれは賑かなものでした。私もばば様に連れて、二・三度行ったことを覚えています。庭には色々の美しい木草を植えて好い楽みの福隠者でしたのに、三・四年経って亡くなり、その家を取替すのも惜しいといつて、伝八が引移って住みました。三日月ほろつという病気がはやって、多くの人の死んだ時、伝八も

喉が腫れたと聞きましたが、三日目にころりと亡くなり、その時父様も大病で、伝八の容子を診察なさることができず、たいそうな力落しでした。

その庭にあった枝垂れの八重桜がひどくみごとでしたので、ばば様が隠居に不幸のあった頃、かたみにお貴いになって、家の庭に植えられました、植替え時が悪かったせいか、根つきませんでした。……

4 二階の湯殿

父様は、その頃また土地を借たしになって普請をしました、ちようど撰津守様が御出府遊ばされて、普請開き早々にいらっしやったことです。庭の桜をごらんになり、御大名方からも数下され物が有りました。出羽様からは浅黄桜を下さいましたが、これは名が珍らしいばかりで、花はよくありません。周防様から下さった大木の桜は優れて好ったのですが、遅く下さったものですから植る場所がなく、庭の角に植えましたので、すみの桜といつてもはやしたことです。

この新館は二階に湯殿がつけて有りました。三尺の縁側から、水を汲むよゆうな仕掛でした。その井戸は井戸側をわかち据えたばかりで、下から桶を通して本井から汲み入れることでした。

湯殿と梯子はサワラの厚い板でした。湯殿はかように良い木を用いるにはおよびませんけれども、二階に湯殿をつけることが世上の評判になったものですから、来る人も心を付けて見るだろうと特にこの木を扱われたのです。

(中略) たびたびいらっしやった大名方は、出羽様・秋本様。大井様はとりわけ数しらず。周防様・相模様。そのほかもありましたが忘れませんでした。

出羽様は格別のことで、いつも女芸者三人、役人二人ぐらい召連ていらっしやるので、御馳走は上り物ばかりですのに、翌日はご挨拶のお使がみえて銀子七枚くださるのが例でした。それ故いかほど饗応申上げても損になるということはありません。他の人はみなおふるまひ申上ることでした。

5 律義な人達

人の気風も、その頃は、下人まで律義で、築地辺の人は心が良かったのでした。出入の商人も物を預けておいて心遣いのない人が多うございました。

そういう人達の中に、虫の鳴くまねを良くして、枝豆を売る人がありまいたつけ。父様もたびたびお呼びになり客のある時など、なぐさみになさったものです。これも律義者で、うちが忙しい時は手伝いに来ましたが、数寄

屋町へ引越して後、一度訪ねて来たことが有りました。爺いになり、歯が欠けて、昔のようにはできませぬと言いましたが、それでも少しは虫の鳴きまねをするのでした。

その頃出入りの豆腐屋も律義者で、家で日々上った豆腐は、二季払いの通帳でしたが、盆暮には十兩前後の払いに成りました。これでも家の暮しに金がかかったことがお分りになるでしょう。五・六丁入りの豆腐入れの岡持が台所に置いてあって、毎日二丁づつ入れるのが定めます。もちろん入用の時には幾丁でも必要なだけおかせます。

豆腐は朝二丁入れて行き、夕方来る時、蓋を明てみて、豆腐がなければまた一丁入れます。中にある時は、屋こしらへの豆腐と取替て二丁置いて行くことでした。豆腐を置くのは豆腐屋任せ、またお上の用の時、下々は幾ら食べてもかまわないうような、大まかなことだったので。豆腐屋も一旦那と言って、主人のように有がたがって、老年に二十両豆腐を売る所は、築地で門跡様と工藤様と讃めたということです。これは私が七つぐらいの時でございます。

6 荷田御風のこと

その頃近所に住んでいた人では、羽

倉東蔵(荷田御風)という人が、大島織部様という旗本屋敷の物見を借りて住んでいましたが、この人は歌詠みのお民(荷田蒼生子)の弟で、真洵の師の子になる人です。(注1) 半左衛門と同じ並びの所で、尾張様のお屋敷を真向うに見る場所でした。(中略)

お民は上の間に住んでいましたが、私が子供の時分、「古今のよみくせ」を直して貰いに行ったことでした。

注1 史料によれば、御風は真洵の師、荷田春満の養子である在満の子で、蒼生子は在満の妹で、御風には叔母にあたる。

『昔語り』には、このほかにも興味深い記事が多いのであるが、今回は周庵の生活に触れた記事のみを紹介するに止めた。本書は、『三書房刊行の『日本庶民生活資料集成』の第八巻にも収めて翻刻されている。興味のある方は直接同書について一読せられたい。

(文責 安藤菊二)

演劇関係図書目録 その2

伝記、芸談、舞台写真集 (京橋図書館所蔵)

市川海老蔵 (9代)	仁村 美津夫 昭28	片岡孝夫 (現代若手歌舞伎俳優集3)	萩原 雪夫 昭47
市川海老蔵 (現代若手歌舞伎俳優集1)	萩原 雪夫 昭47	女形芸談	河原崎国太郎 昭48
猿翁	市川 猿之助 昭39	舞台のおもかげ実川延若	安部 豊 大11
市川猿之助 (現代若手歌舞伎俳優集2)	萩原 雪夫 昭47	沢村源之助 (4代)	佐藤 霽子 昭49
猿之助随筆	市川 猿之助 昭11	宗之助の面影	伊藤 都喜 大14
市川小団次 (4代)	永井 啓夫 昭44	歌右衛門自伝 (5代)	中村歌右衛門述 昭10
左団次芸談	市川 左団次 昭11	魅玉夜話、歌舞伎の型	" (5代) 昭25
市川左団次芸談きき書	北条 誠 昭44	演技自伝	中村翫右衛門 昭48
寿の字海老	市川 寿海 昭35	歌舞伎の演技	" 昭49
市川寿海舞台写真集	(舞台展望社) 昭28	芸話、おもちゃ箱	" 昭45
団十郎三代	加賀山 直三 昭18	人生の半分 上・下	" 昭34
市川団十郎	西山 松之助 昭35	鷹治郎の歳月	中村 鷹治郎 昭47
市川団十郎 (9代)	伊原 敏郎 明35	中村鷹治郎を偲ぶ (初代)	白井 松次郎 昭10
九代目団十郎と私	市川 翠扇 昭41	役者馬鹿	中村 鷹治郎 昭49
市川団十郎 (11代)	(淡交社) 昭45	中村吉右衛門	河竹 繁俊 昭30
七世市川団蔵	市川 九蔵 昭18	吉右衛門自伝	中村吉右衛門 昭26
羽左衛門伝説	里見 淳 昭44	吉右衛門日記	" 昭31
十五世市村羽左衛門 舞台写真集	(木村伊兵衛作品) 昭26	舞台のおもかげ中村吉右衛門	安部 豊 大 8
おどり	尾上菊五郎 (6代) 昭23	役者の世界	中村 芝鶴 昭41
六代目菊五郎評伝	渥美 清太郎 昭25	続、役者の世界	" 昭47
尾上菊五郎舞台写真集 (6代)	(木村伊兵衛作品) 昭26	手前味噌	中村仲蔵 (3代) 昭44
尾上辰之助 (現代若手歌舞伎俳優集4)	萩原 雪夫 昭48	大文字草 (伝、5代中村伝九郎)	中村 芝鶴 昭36
踊りの心	尾上 松緑 昭46	秀十郎夜話	千谷 道雄 昭34
梅の下風	尾上梅幸 (6世) 昭28	父 三津五郎 (7世)	八世坂東三津五郎述 昭38
舞台八十年、松助芸談	邦枝 完二 昭3	琴松芸談、松のみどり	井口 政治編 昭12
		守田勘弥	木村 錦花 昭18
		舞台かがみ (守田勘弥)	安部 豊 大15

催し物のお知らせ

◇ 東京を語る会 第13回

日時 昭和49年10月19日(土)

午後2時～4時

講演 洋学とその時代

講師 大久保利謙先生

会場 当館地下二階 鑑賞室

『解体新書』刊行二百年を記念して
蘭学資料研究会副会長で、文化史に御
造詣の深い大久保先生をお願いして、
蘭学Ⅱ洋学の内容と、それを受入れた
時代について、お話をさせて頂くこと
にしました。御来会をお待ちします。

◇ 演劇講座 会場 当館鑑賞室

期間 11月2日～11月16日

第1回 11月2日(土)午後2時～4時

歌舞伎の演技と演出

国立劇場 芸能調査室 服部 幸雄氏

第2回 11月9日(土)午後2時～4時

芝居の衣裳と小道具

国立劇場 芸能調査室 松井俊諭氏

第3回 11月16日(土)午後1時～3時

歌舞伎の音楽

十二世家元 藤浪小道具 藤浪与兵衛氏

十一世家元 田中伝左衛門氏

昨年は演劇の歴史を概観しましたが
今年、歌舞伎についての講座です。
お気軽にご参加下さい。